

東亞音樂文化展

東亞樂器展及び
東亞音樂講演・実演

会期 六月 十六日（招待日）
十七日（土）—二十五日（日）

会場 上野公園 東京科學博物館

主催 音樂博物館建設準備會
文部省東京科學博物館

後援 國際文化振興會・日本文化協會
日本文化中央聯盟・大日本音樂協會
日本音樂學會・東洋音樂學會

告知ポスター

イラストは箏篋を奏する山海慧菩薩像のように見受けられる。復元正倉院樂器の「箏篋」および瀧遼一が中国北部で入手した「手箏篋」が本展の呼び物であったことから、このような絵柄が採用されたのではないかと推察される。

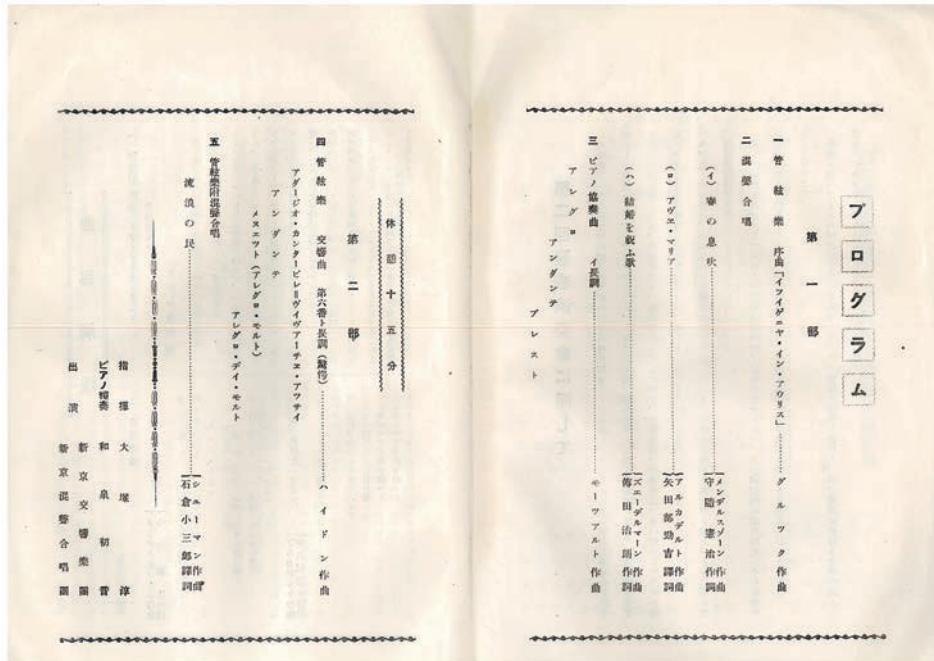


会場の様子（『自然科学と博物館』10（9）、東京科学博物館）

本展に際しては招待状やプログラムの英語版が作成されており、実際には外国人と思しき来場者の姿が見られる。下図には音楽博物館建設準備会の委員長でもあった田辺尚雄が、男子学生に展示品を解説する様子が窺える。

独立行政法人国立科学博物館蔵

占領下中国、新京（長春）のピアニスト



新京音楽協会 定期第二回発表演奏会
プログラム

1938年(昭和13)年6月18日午後七時
会場:西広場・満鉄社員倶楽部
指揮:大塚 淳
ピアノ独奏:和泉初音
(モーツァルト ピアノ協奏曲イ長調)
出演:新京交響楽団 新京混声合唱団

和泉初音(1900年代-1980.11)

東京音楽学校ピアノ本科1927(昭和2)年卒。新京特別市(長春)公署の事務官・和泉徳一の夫人として、新京の音楽界で影響力を持っていた。新京音楽協会講習所でピアノを教え、同協会の主催するコンサートで何度かピアノを披露した。

(岩野裕一『王道楽土の交響楽 満州——知られざる音楽史』音楽之友社、1999年)

図版:星野幸代所蔵



ピアニストとして活動していた頃。



晩年は東京の吉祥寺、調布等に住み、自宅で小学生から大人までの門下生を教えた。

図版：星野幸代所蔵



戦後は、東京学芸大学の音楽科で教鞭を執った。
1954 (昭和31年) 頃、自宅にて大学の学生たちに囲まれて。

最前列中央、和服姿が和泉初音。
佐藤光子氏 (中列右端。元小学校音楽教諭) 提供。

1930年代における葉浅予のスケッチ



ミゲル・コバルビアスのイラスト[←]

葉浅予は1933年、メキシコ人画家、ミゲル・コバルビアスとの出会いを通じて、スケッチを始めることとなった。葉浅予編集時期のグラフ雑誌『時代』には、コバルビアス本人の絵を見ることができる。

「珂佛羅皮斯及其夫人」(『時代』第5巻第4期、1933年)

北平のスケッチ [↓]

葉浅予は1935年4月1日、国民政府鉄道部主催の衛生運動宣伝に同行し、南京から天津へと旅した。その後、同年4月中頃に北平(当時の北京)に着くと、現地で膨大な量のスケッチを制作することとなる。このときのスケッチの経験は「速写」という方法論への自覚を促し、葉浅予自身の創作活動のあり方を変えることともなった。

「古城拊掌集」(『時代漫画』第18期、1935年6月20日)



『汗血周刊』「旅行漫画」欄 [→]

葉浅予は1935年12月7日から1936年2月23日まで、雑誌『汗血周刊』において「旅行漫画」欄を9回担当した。この「旅行漫画」欄において、彼は南京を題材としたもののほか、富春江、山東、蘇州、そして北平の人々を描いたものを発表している。

「金陵世家」(『汗血周刊』第5巻第23期、1935年12月7日)



山東の女性たち [↘]

この作品は、1935年に山東で見た人々をモデルとして、毛筆を用いて作品へと仕上げたものである。葉浅予はこの方法を1940年代以降、より積極的に用いるようになり、中国画制作への動機を与えることにもつながった。

「齊魯風光」(『旅行漫画』上海雜誌公司、1936年)



馬蹄脚



曲阜老婦



1.
1945年、重慶育才学校舞踊公演

『影像・中国：1911-1960文化思潮與社会運動 西化・伝統』
(中央通訊社作、台北・商周出版)



2.
1940年、三青团湖南支团部話劇公演

出所：『影像・中国：1911-1960文化思潮與社会運動 西化・伝統』
(中央通訊社作、台北・商周出版)



3.
1937年、『保衛蘆溝橋』上海公演

出所：『影像・中国：1911-1960文化思潮與社会運動 西化・伝統』
(中央通訊社作、台北・商周出版)



4.
1941年、『昇官図』上海公演

出所：『中国話劇百年図史』（山西教育出版社、2006）



5.
1940年、『明末遺恨』上海公演

出所：『中国話劇百年図史』（山西教育出版社、2006）

特集：移動する戦時プロパガンダ・メディア

戦争は、侵略・占領及び避難のため人の大移動を伴うのが常である。盧溝橋事件の起きた1937年7月から、日本は上海(同年11月)、南京(12月)、武漢(38年10月)と、中国の主要都市を次々に占領した。それに伴い、中国の人々は沿岸部から内陸部へ、また英国の統治する香港へと大移動した。太平洋戦争が始まるとその香港も陥落し、上海のいわゆる「孤島」すなわち中立地帯であった英仏租界も日本軍に占領され、その数1000万人に及ぶさらなる大移動が起きた¹。その代わりに国民党の臨時首都となった重慶が文化の中心として役割を担い、延安が共産党の根拠地となった。このように、中国は淪陷区(日本軍占領区)、国統区(国民党支配区)、解放区(共産党支配区)、に分かれ、文化界もそれぞれ様相を異にしていた²。

以上は日中戦争というカテゴリーの要因による人の移動である。ただ、満州事変に発する十五年戦争という観点からすれば³、日本から“満州”へ移動する日本人、中国東北部から南下する中国人、という大量な人の流れは1931年から始まっていた。

本特集は、この時期に戦況にしたがい、または宣伝のために日本国内・淪陷区、国統区を移動した身体的・視聴覚的芸術を対象とし、それらがいかに日中諸勢力の意図を担い、機能していたか、その一端を示すことを目的としている。具体的には、演劇〔楊論文〕、音楽〔葛西〕、漫画〔城山〕、ダンス〔星野〕にかかわる芸術家たち／芸術がどのように往来し、日本軍の士気高揚ないし「大東亜」共栄圏宣伝・中国国民党寄り／共産党寄りの抗日宣伝といった異なる目的のもと、どのようにプロパガンダ・メディアとして機能したか／或いは他の役割を果たしたかを、実証的に再現することを試み、考察する。

なお、演劇、ダンス、音楽、漫画は、日本及び上述の中国各区域(淪陷区、国統区、解放区)においては、プロパガンダ・メディアとして非常に密接に連動し合っていた。一例を挙げれば、中国の抗日宣伝のための移動演劇隊には舞踊家、作曲家も参加して演劇に挿入されるダンスや歌を担当し、漫画家はポスターやチラシ、舞台背景等を担った。当該時期における各ジャンルの概観は、論考ごとに設けた「導入」をご覧いただきたい。

1

藤井省三『20世紀の中国文学』放送大学教育振興会、2005、105頁。

2

この時期、淪陷区、国統区、解放区、「孤島」という文化地図区分は、既に中国文学の分野では通説となっている(宇野木洋／松浦恆雄編『中国二〇世紀文学を学ぶ人のために』世界思想社、2003、15-16頁及び前掲注1藤井省三、101頁)。

3

阪口直樹『十五年戦争期の中国文学』(研文出版、1996)は、1930-40年代の中国文学の独特性を理解するという観点から、「日本侵略拡大が迫った民族的課題を基準として」、1930年から1945年までという時期区分概念を提起している(8頁)。また、文天行編著『中国抗戦文化編年』(四川辞書出版社、2015)は、1931年の事項から始まる。